

# 蜂須賀正韶と笛子 (三)

——下田歌子研究 (三) ——

大正八年(一九一九)十一月から文學部と称した歌会が開催されるようになった。蜂須賀笛子はこの歌会の会員となり、和歌を詠出していた。帝國婦人協會實踐女學校文學部発行の歌集『竹の若葉』(昭和二年刊)や文學部の歌会の記録である『競点の巻』『合評の巻』『歌合の巻』に笛子の和歌を見ることが出来る。本稿では、『竹の若葉』に収載されている笛子の和歌を紹介する。また歌会の記録に記されている笛子の和歌、和歌に添えられている点者(判者)としての下田歌子の評及び巻末に書かれている評を翻刻して紹介をする。また点者の評をとおして歌子の詠歌についての見解を考察したい。

## 大井 三代子

### 和歌の指導

明治十五年(一八八二)三月、下田歌子は下田学校を東京麹町区一番地に創設した。三ヶ月後に下田学校は桃天學校と名称を変更した。伊藤博文、山縣有朋等の勧めにより開設したものである。東京や京都で女学校や女塾が設立されるようになり、貴族や高官たちは、自分たちの子女たちに新時代にふさわしい教育を受けさせたいと望むようになった。桃天學校では少女たちよりも貴族や高官の婦人たちが多く、彼女たちはその地位に相応しい教養を身につけることを目的としていた。

『実践女子学園一〇〇年史』に収載されている「桃天学校の日課・試験表」(明治十五年)を見ると、月火水金の

四日の午前中には「歌点作文添削句読習字」とあり、土曜日の午前中には「本科生歌会」とある。また「桃天学校学科課程及び教科書・試業一覽」（明治十六年）には第一年から第四年まで和漢文の科目の中に歌を入れており、和歌の指導に力をいれていた様子がうかがわれる。当時の貴族の子女にとって『万葉集』や『古今和歌集』などの和歌の書を学び、和歌を詠むことは教養として欠かせないことであつた。

少女の頃に桃天學校に入学した本野久子は、歌子の和歌の指導の一端を次のように述べている。

塾生の誰もが最も力をいれたのは、その当時からすでに天下一品の面影があつた源氏物語のお講義と和歌のお題を頂いて作ることの二つでした。和歌の宿題がよく出来ると、先生はあの無類の達筆で、そのうちの秀歌を短冊に書いて下さいます。私共はそれをお手本にお習字をするのですから、まるで自分の歌を先生のお手本通りに、一つ一つ完全なものにしてゆくような気持ちで、これが非常な励みとなりました。

『下田資料目録』には、明治十七年三月に桃天學校生徒の歌合『菊の霧』などの資料を掲載している。

明治十八年（一八八五）に華族女學校が開設されると桃天學校の生徒の多くは編入し、桃天學校は閉校となつた。

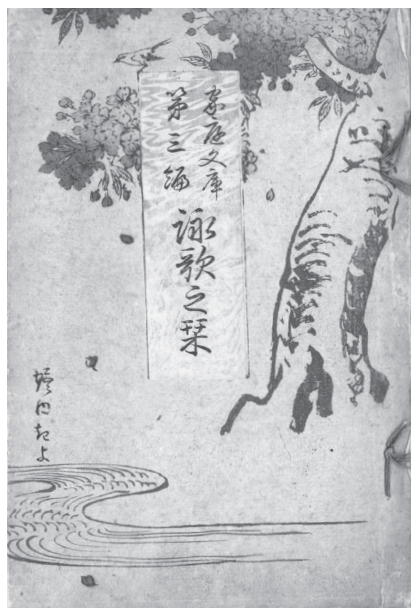
華族女學校生徒・卒業生の『七月歌合』（明治二十年代）などの資料があり、華族女學校でも和歌の指導をしていたことが知られる。

明治三十二年（一八九九）に實踐女學校が設立された。明治三十二年の「学科課程時間割表」の備考に詠歌は随意課として生徒の希望によって受けることができるとしている。明治四十二年の「高等女学部学科課程表」でも随意課としている。大正十二年の「実践女学校国文専攻科学科課程表」では、第一学年から第三学年まで国語の授業の中に詠歌を入れている。組織変更に伴つた課程内容の変更ではあるが、国語の授業の中の講読、文法、作文、と並ぶものとしてゐる。

本野久子が「和歌の題をいただいで作る」と述べているように、当時は和歌の題を与えられて題詠をし、添削指導を受けるというものであつた。現在では見たもの、心に思ふ浮かぶものを詠むといった自由詠で題詠歌は行われていないようである。

### 『詠歌の葉』と『新題詠歌捷徑』

歌子は早くから和歌の指導を受け、また桃天學校、華族女學校や實踐女學校で生徒たちに和歌の指導をしてきた。



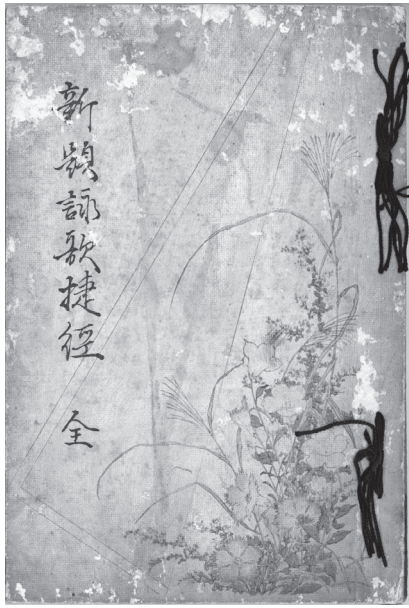
『詠歌の葉』

教える者と指導を受ける者としての経験を生かして、明治三十四年（一八九一）に博文館から『詠歌之葉』（家庭文庫第三編）を出版した。「歌學に就きての心得」では歌の起源、沿革、種類、将来の国歌新たに起るべき理由、文法について、「歌の式に就きての心得」では、歌會の式、歌の書式、歌の奨掖について、「詠歌に就きての心得」では、歌の精神、歌の組織、歌の姿勢、歌の材料、題詠。画賛、詞書等、作例について述べている。和歌を学ぶ人や指導者の手引きとなるものである。

歌子は歌の心得と精神ついて次のように述べている。歌の道に入ろうとする人は、歌字も詠歌もするべきである。

歌を詠もうとするときの一つの心得は、「意を誠にすることである。詠出する歌は、真景に迫り、実物をとらえるのでなければ秀詠、名歌が出てくるものではない。虚飾浮薄の歌を詠まないように心掛けなければならない。また歌には精神がある。歌の精神とは人の至誠、至情に発するもので、偽り飾りなき真成の歌を詠むべきである。

歌の種類で長歌、短歌、旋頭歌、今様、唱歌、軍歌、新体詩について解説している。特に今様については、国歌の改良と関連付けて次のように述べている。今様は今体の調べで、七五、七五と続けて終わりも七五で止める。明治の文明開化の空気は広まってきたのに、我が国歌は古い時代の定規法則に束縛されて、いまだにその範囲から脱却することができない。歌の根本とは、「感じより生れたり」ということである。感じより生まれたものは感じに働き、感じに終わるべきことを忘れてはならない。感じの働きは、我のみ感ずるに止まらず他人をも感じさせるものである。音楽教育の唱歌に今様を用いて改良を計れば国歌の進歩を促す良い手段となるであろう。国歌の改良は、国風音楽の改良ともに行われて完全なものになることができるだろう。我が国固有の国語と口調に似ている漢語、洋語を取り入れて、今様体の唱歌に詠み入れ、歌の改良を計りたいとしている。

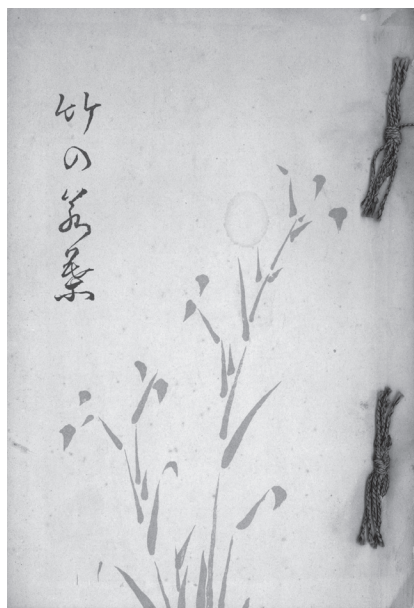


『新題詠歌捷徑』

また題詠については次のように述べている。題詠は実際に歌を詠もうとする時のための稽古練習である。また折りがあれば、見るもの聞くものを、心に思うまま読むことを試みるべきである。歌の題が「月」「雪」「花」のように一字一物であれば単純に題のことを詠む。やむをえず題に添える景物材料を必要とするときは、それらは軽く淡いものにする。山月、都花、野雪のように「何々の月、何々の花」という題を合せ題という。この場合、月、雪、花が主となり重く、山、都、野は軽く読む。心に真景を思い浮かべて詠めば実際に見聞きしたように歌を詠むことができる。歌子のこうした考え、姿勢は、残されている歌会の記録にも

示されている。

『新題詠歌捷徑』は明治三十四年（一九〇一）十月に三省堂書店から出版された和歌の手引書の一つである。例言で、新題で和歌を詠むのには難しいものがある。和歌は古調のままに今日まで伝わっているものなので、新題に取り入れるのは少ないと述べている。本書は歌会で出た新題を集めて、題の解説と作例を掲載したものである。新年拝賀等の年中行事、帝國議會、女学校、舞踏会、農家、自転車等の乗物、電話等の通信機器、幻燈、瓦斯燈等の照明などを取り上げている。高崎正風、小出榮、黒川真頼、税所敦子、小池道子等の歌人の和歌を作例として取り上げている。新題とは、新奇の事柄、物体などを歌の題とするものという。新題を詠むときは、形状、効用などを詠むことを良しとする。題が示す事物を知らない人にも理解されるように詠むべきである。題を設けて詠むことが多い今の世では、新題を出されて詠まずにすることができないのがつらいことである。事柄や物体が和訳されていればそれを詠み入れることができる。今様の言葉や物の名であっても和歌の調べに障らなければそのまま詠み入れることができると述べている。



『竹の若葉』

## 文學部の歌会

歌子を書いた『竹の若葉』の「はしがき」によれば、「此の會催しそめたおりしは、わが専門學部の国文科にて文學部といふものを設け」とあり、国文科に付属する会としてゐる。また二十余年前になよ竹會という歌会を開催していた。この会は中絶していたのであるが、その頃の参加者が文學部として歌会が開催されることを聞き伝えて参加することになったと述べてゐる。

文學部という名称は、現在の大学の学部と異なる。「なよ竹」第二十三号（昭和十年）によれば、實踐女子専門學

校學友會の組織の中に、総務部、學藝部（國文科・英文科）、體育部が設置され、総務部では災害のための義捐金寄贈、學藝部では講演会を、體育部では運動会を開催などの活動のために予算措置がされている。文學部という名称もこれと同様のものと考える。

文學部として歌会が再開されると、なよ竹會に参加をしていた教え子たちが参加した。下田歌子の後に愛國婦人會會長に就任した本野久子、服部卯之吉の妻で秋瑾の實踐女學校入学に関わった服部繁子、近衛篤磨の妻の近衛貞子らが會員として参加した。蜂須賀笛子は、下田歌子の紹介によるものと考ええる。

「なよ竹」第二十三号（大正十四年十月）の「文學部だより」には、「文學部は、帝國婦人協會の一事業として起つたもの」であり、「文學の研究を目的とし、只今は先づ作歌々學のみを課し會長下田先生に添削、講話をお願いして」ゐる。また「文學部は歌道研究、奨励の爲め毎月一回（兼題二）或は競點、或は各評、或は歌合せ等の一を催して」いて、「婦人協會々員ならずとも實踐女學校教職員、卒業生或は右の人の紹介があれば入會が出来る事になつて」ゐると記されている。

大正八年に「帝國婦人協會文學部規程」が定められた。次はその主なものである。

一 本部員たらんと欲する者は、申込書に住所姓名を記し東習金壹円をそへて差出さるべし 但し帝國婦人協會々員実践女学校出身者及び同校在學生は束修を要せず

一 本部は歌道研究練習の爲毎月一回競点各評及び歌合等の一を催して斯道の奨励に資す 但し当分の内一カ年中八回は競点、二回は各評、二回歌合とす

一 本部競点歌合の批評は会長に請ひ、各評は各自詠出者の評を付し而る後会長の批判を請ふべし

一 本部員は其の希望により特に会長に請ひて一カ月五首以内の添削を請ふことを得

一 本部は春秋温暖の好季に於て歌会を催すことあるべし  
一 本部員は歌学に関する講話を会長に請ひて聴聞することを得

「なよ竹」第十四号の「文學部だより」によれば、大正十五年一月三十日の午後三時から五時過ぎまで発会が開催され、兼題の披講と新年会が行われた。来会者は七十余名、在校生の会員を加えると百余名であった。後述する歌会の記録である『競点の巻』『各評の巻』『歌合の巻』で和歌を詠出している者は四十名弱なので、毎月の歌会ではそのく

らいの人数が集まったのではないかと思われる。

『竹の若葉』では短歌のみが収載されているが、実際の文學部としての歌会では短歌、歌合、今様の作歌のほかに一種物合せが行われた。「なよ竹」第十三号の「文學部だより」によれば、一種物合せとは平安時代の宮中及び貴族の邸宅で臨時に開催されたものである。まず種々の歌の題を分けて皆でそれを探る(探題)。その探りあてた題によって各自が歌を詠む。時にはその題意に適う古歌を選んで、その歌の意味をとった食物を添えて歌と共に出す。またその食物に表した趣味の如何、その食物の品評等をし、食物の意匠、味、歌の最も良いものを第一とし、次を二等三等として興を催したものである。できあがった御馳走を持つていき、ある時は生の物を持ち寄り調理したということもあつたようである。これが歌を詠むということの練習になり、御馳走を自分で作るので、料理の練習や種々意匠を凝らすという参考になると述べている。一種物合せは、歌子が永田町に住んでいた時に、新年の会に余興的に開催したもので、文學部が再興されると新年の発会にはこれを催すことになった。「文學部だより」には一種物合せ十一例を記している。例えば、近衛貞子は題「若菜」に浅緑餅菓子を添え、その頭に少し白砂糖をかけて「名はかりの若菜なりけりわか宿のかきねはいまた雪ふかくして」と詠んだ。

加納須磨子は題「岩」に「君か代は千代に八千代にさ、れ石のいはほとなりて苔の蒸すまで」と特に有名な古歌を選び、岩おこしとさざれ石という菓子を添え意匠を示した。下田歌子は、題「新年祝」に品物は焼昆布と焼するめ、松重ねの紙を敷いて、「まれなりと聞きつる年も迎へけりなほ彌榮のみちにす、まむ」思ふとちよろ昆布顔を合せつ、つむ言の葉よいかにたのしき」と詠んでいる。

歌会の記録の表紙の中には「一ノ組」「二ノ組」と記しているものがある。『竹の若葉』の凡例によれば「一、二組とわけられたのは老練の方と初學びの方の爲にとの、心しらひ」であり、歌の題も「少しむつかしい題と、や、たやすい題とが別々に出され」とあり、早くから歌子の指導を受けていた者とそうではない若い人との力量を考えて分けている。

### 『竹の若葉』

歌集『竹の若葉』は、大正八年十一月から昭和二年十月までの文學部会員の詠出した和歌の優秀なものを選び編集したものである。点者としての歌子の和歌は大正十一年から詠出したので、それ以前のものには収載されていない。「香雪叢書」第二巻には歌子の和歌が収載されているが大正期

のものは少なく、大正期の歌子の和歌を知るうえで貴重な資料である。新年、春の部、夏の部、秋の部、冬の部、雑の部に分けて編集されていて、その中に笛子の和歌三十一首を見ることが出来る。次に掲載される順に歌の題（開催年）、笛子の和歌を記した。詠出者名はすべて松田笛子である。

門松（大正十年）

少女子がつく羽子それてわかぬかな門の小松の葉にやこもりし

梅の花咲きたる宿に客人あり（大正十四年）

梅の花咲き句はず都人我山住をとひこましやは

名所春曙（大十四年）

梅が香もゆるくうこきてあかつきのかすみわかる、月が瀬の里

若草（大正十年）

貸家のみたちならひつ、わかくさのもゆるところのせはくなりたる

土筆（大正十四年）

新らしき家居たちそひ土筆つむ原もことしはせはくなりぬ  
る

採苗（大正十年）

さなへとる山田の賤のいとなさをおもいやらなんみやひを  
のとも

燕（大正九年）

紅のつゝし花咲く庭の面にむら雨ふりて燕とふなり

美しき兒の苺くひたる（大正十二年）

赤きほゝしほそめて紅のいちこくふ子のゑ顔めくしも

山吹（大正十年）

ふゝめるもさかり過ぎしも藤の花ゆかりのいろはなつかし  
くして

夕立（大正九年）

まとの戸をさすひまもなき夕立に机のふみもしとゝぬらし  
ぬ

蝶（大正十年）

高くひきくむつれあひつゝとふ蝶のかけものときき花の下  
みち

蚊遣火（大正十年）

ふくるまで文よむほとにかやり火のもえつくしけん蚊のこ  
ゑそする

新竹（大正十年）

去年よりも今年はやとのわか竹のふとしきかけそ多くなり  
たる

夏羈旅（大正十一年）

かけもなき道行くたひは馬よりものれる人こそまつつかれ  
けれ

渡頭子規（大正十三年）

わたし舟さして行手の川岸の若葉の森になくほとゝきす

蟲（大正九年）

さしこめしむくらか門にさひしくもはたにきはしき虫のこ  
ゑく



暁霧（大正十三年）

世の中のちりもけかれもたちかくすさきりに清しあかつきの庭

雁（大正九年）

月高く軒にかゝりて中そらに小さく見ゆるかりの一つら

擣衣（大正九年）

人里のありとも見えぬみ山へにふけてきぬたの音の聞ゆる

漁村擣衣（大正十三年）

をの子等は今宵も沖にいてはこゝ残るつま子やきぬたうつらん

秋田（大正九年）

あかつきのきりのそこなる小山田の稻のほのくしらみそめたる

木枯（大正十年）

ものゝねをふきさそひ來し木枯はすきものからなつかしきかな

霜（大正九年）

白菊の葉さへそ赤くなりける結へるしものふかさしられ

霰（大正十年）

白きはなこほれたるかと思つるかな八ツ手のひろ葉まろふ

神樂（大正十年）

舞人の小忌の袂のしろたへも庭火にはえて貴とかりけり

閑窓雨（大正十二年）

まと近き机のふみもぬれてけりはせをにそゝく雨のしふきに

松（年不明）

うちつけに松のけふりと思ひしはみどりの花のちるにさりける

山人稀（大正十年）

白雲のゆきかふのみとみし山をまれにはのほる人もありけり



奨励法であるとしている。

『下田資料目録』を参照すると、「歌会・歌合・競点」の項には約四十点の資料がある。昭和十一年七月開催の『競点の巻』があり。歌子の晩年まで歌会が開催されていた。昭和五年三月から昭和六年一月に開催された歌会の記録十二冊に笛子の和歌を見ることができ。次はそれらの資料の書誌である。書名の後の（ ）の数字は下田資料の番号である。

## 短歌

### 1 競点の巻 (二二四)

表紙 墨書打ち付け書き

昭和五年三月

競点の巻

文學部

詠草 ペン書 競点・評 赤ペン書

本文八枚 縦二四・五 横一六・八糎

### 2 各評の巻 (二二六)

表紙 墨書打ち付け書き

昭和五年五月

各評の巻

文學部

### 3 競点の巻 (二二九)

詠草 墨書 評点・評 朱筆

本文九枚 縦二七・八 横二〇・〇糎

表紙 墨書打ち付け書き

昭和五年七月

競点の巻

文學部

詠草 墨書 競点・評 朱筆

本文八枚 縦二七・六 横二〇・一糎

### 4 各評の巻 (二三二)

表紙 墨書打ち付け書き

昭和五年九月

各評の巻

文學部

詠草 ペン書 競点・評 朱筆

本文八枚 縦二四・四 横一六・七糎

### 5 競点の巻 (二三三)

表紙 墨書打ち付け書き

昭和五年十月

競点の巻 一・二の組

文學部

詠草 ペン書 競点・評 赤ペン書

本文十一枚 縦二四・五 横一六・八糎

裏表紙表に歌子の評が記されている。

6 競点の巻(二二三)

表紙 墨書打ち付け書き

昭和五年十一月

競点の巻

文學部

詠草 墨書 競点・評 朱筆

本文九枚 縦二七・四 横一九・八糎

裏表紙表に歌子の評が記されている。

7 競点の巻(二三四)

表紙 墨書打ち付け書き

昭和五年十二月

競点の巻

文學部

詠草 墨書 競点・評 朱筆

本文九枚 縦二七・四 横一九・八糎

8 競点の巻(二二二)

表紙 サインペン打ち付け書き

競点の巻

詠草 謄写版刷 競点・評 赤ペン書

詠出者名 黒ペン書 後から書き加えられたもの

本文九枚 縦二四・五 横一七・八糎

表紙が欠落していたため資料整理を担当していた図書

館職員が和紙に書名を書き付けて表紙とした。

巻末に「昭和六年一月半」と記されている。

今様

1 競点の巻(二二七)

表紙 墨書打ち付け書き

昭和五年六月

競点の巻

文學部

詠草 墨書 競点・評 朱筆

本文一枚 縦二七・八 横二〇・〇糎

一ノ組は今様、二ノ組は短歌を詠出している。

歌合

1 歌合の巻(二二五)

表紙 墨書打ち付け書き

昭和五年四月

歌合の巻

文學部

詠草 ペン書 判定・評・詠出者名 赤ペン書

2 本文三二枚 縦二四・六 横一六・八糎  
歌合の巻(二二三〇)

表紙 墨書打ち付け書き  
昭和六年四月  
歌合の巻

文學部

詠草 墨書 判定・評 朱筆

本文三三枚 縦 二七・四 横一九・八糎

3 歌合の巻(二二三六)

表紙 墨書打ち付け書き

昭和六年四月

歌合の巻

文學部

詠草 ペン書 判定・評・詠出者名 赤ペン書

本文三七枚 縦二四・九 横一六・八糎

### 和歌と評の翻刻・解説

右の書誌の順に従って、笛子の和歌とそれに添えられた点者(判者)歌子の評、巻末に記された評を翻刻した。書名に続けて歌会の開催年月を書いた。一回の歌会では題が二つ出ている。そのために「題一」「題二」と区別して歌の題を記した。詠出者名の笛子の氏名が異なるので、それ

ぞれに氏名を原本に記載されているままに記した。原本に近い形で競点(日月星辰)、歌番号を記し、和歌、和歌についての点者の評を翻刻した。巻末の点者の評は「点者評」と付記して翻刻をし、最後に解説を記した。翻刻した箇所については、巻末の図版を参照していただきたい。

### 短歌

1 競点の巻 昭和五年三月(二二四)

題一 田家春雨

松田笛子

月上 二七 春雨ののとかにけふる田舎みちくはもたる人のぬれつゝそ行く

をりからの光景げにとおほゆなほ四句今少しあらまほしき心地は  
すれどさてもありなん

題二 捨子

笛子

月上 六二 みとり子のゑかほの上にあはれる花をすてたる親はな(いか)にと(削除)見るらん  
げにさることもぞとあはれにこそは猶結句はかくあらまほし

点者評

こたびの巻はめでたきも少なからずいと心ゆきて  
ぞおぼえたりしなほ捨子のうたことによし  
と覚えつるがありしは女性の歌としてはいとつき  
くしくこそありけれ春の光は言葉の花の  
色をも香をも増すらんと頼もしくこそは

昭和五年三月初旬

点者しるす

競点はどちらも月上で高得点となっている。競点は通常  
日月星辰で示される。次の『各評の巻』の点者の評に「第  
二位に定めつゝも猶ことに勝れたるは上の印」をしたと述  
べている。笛子の和歌に上を付け加えたのもその意である。

歌子は「田家春雨」を詠んだ笛子の和歌を良しとしなが  
ら、「今少しあらまほしき」と評している。この題で日を  
得たものは一名、本田一子の「むしろ織る音ものとかに聞  
くゆなり春雨けふる小田の一つ家」である。この和歌に対  
して歌子の評は、「情況げにとおぼえていひのなしもとゝ  
こほる所がなし」と述べ、また「一つ家」を結句にもつて  
きたことを「新色灰めきぬかし」と評価している。

「捨子」では、「ちる花をすてたる親」は、花を捨てると  
子を捨てるをかけ、子の笑顔を見つめる親の心情に心を寄  
せた。

2 各評の巻 昭和五年五月（二二六）

題一 梅實

星 一二 むしくひのこゑに梢を見あくれば三つ四つ<sup>四二</sup>

つ（に）うめる（り）<sup>三</sup>梅の実

めくき小鳥思ひよれたれどこの梅の實のさまを  
見ればこは同じくは初二句

「さみだれの晴れ間にいてゝ、」などあらん方つ  
きくしかるべく下旬もかくあら

はやされどもとのまゝにても無下に悪しとは

あらず

題二 水鶏

星 五七 若楓うつる（ゆらく）みきはに声たて、あはれ

（削除）<sup>二</sup>くひなのなに（を）<sup>一</sup>た、く（なる）ら  
ん

光景つきくしくはあれど四句少し心ゆか

ず四五句かくて

立ち勝りぬべし猶二句同じくはかくあらま

ほし

点者評

こたびの巻は思ひの外にめでたきが多くて

ほとく思ひまどひ給ひき故に第二位に  
定めつゝも猶ことに勝れたるは上の印して  
置きつ題は二つながら取材狭き方なりし  
をかえすくもうれしうぞ覚えし  
たゆみなきいそしみにやうくことのはの  
玉のひかりもそひたまふらんと頼もし  
このをりすぐさず励みたまへや

昭和五年五月半 點者しるす

「梅實」では四句の「三つ四つ二つ」の「二つ」を「二つに」とし、さらに「三つ四つ」と入れ替える。「うめる」を「うめり」とし、読む順として「うめり」に「三」、「二つに三つ四つ」に「四」を付し、「一」「二」がない。添削のとおりに読むと「うめり二つに三つ四つ梅の実」となる。笛子の和歌ではこの枝に三つ四つと数え、別の枝に二つを見つける。歌子の添削では、梅の実を、二つ三つ四つと順に数えている様になるか。添削の意図が理解しにくい。

「水鶏」の和歌は、「あはれ」と感情を表現する言葉を入れず情景を歌う。また下句を「なにをくひなのたゝくなるらむ」と添削している。

3 競点の巻 昭和五年七月(二二九)

題一 天の川

月上 二七 現し世のあつさも夜は消えてけり天の河原の  
風や吹くらん 松田扶盈子

申すむねなくめでたしされど下句少し耳  
なれたる心地すれ  
ばいかにそや覚ゆれど優にけだかくいと  
すてがたくなん

題二 湖上舟

扶盈子

月上 五九 ふき落ろす箱根嵐に芦ノ湖やうかへし(一葉  
の小)舟の(削除)ゆれにゆれつゝ、

げにさる事もこそはもとのまゝにてもよ  
く聞え  
れど四句かくあらばことにをかしかるべ  
くぞ

点者評

こたびの巻湖上はめでたく天の河  
は少したち下りて見えしはこは  
棚機のかたによみ人のこゝろ引かれ  
たまひしにて強ち歌がらの悪し  
きにはあらざりしをと思ふにいとほし

なほ秋風たちなむ日を待ちて

更に光そへなさんことの玉かづき

いてたまへとこそは

點者

昭和五年七月半

笛子の和歌は優雅であるが、「天の河原の風や吹くらん」は平凡な表現である。卷末の評では、「天の川」という題では、詠者が七夕を思い心惹かれて歌が悪いという。そのためか「天の川」では競点日を得た和歌はない。

「湖上舟」では、嵐に芦湖の湖面は波立ち、小舟が波にもまれるようにゆれている様子を歌った。「うかへし舟」を「一葉の小舟」とすれば「ゆれにゆれつつ」が生きてくる。この題で日を得たのは一名である。

4 各評の巻 昭和五年九月（二二二）

題一 早秋

松田扶盈子

月上 三二 あきなれや（さ）しめ（削除）忘れたる窓の

戸を吹き入る風のけさは身にしむ

こも二句をかしもとのまゝにてもありぬ

べけれど同じくはかくぞ猶しひて

いはゞ初秋にあらまほしき心地す

題二 孝

扶盈子

月 三六 たちちねの親（を）思ふ時いつもくをさな心

にたちかへりつゝ、

げにぞ子と云ふもの、真情なるやされど今

少し孝の心しらひ深くあら

まほしくぞ覚ゆるさはれ大方申すむねも少

なければ

点者評

こたびの巻はいとめでたきが多くて思ひまどひつゝ、抜歌あまたものしつるいとく珍らかなるためしにこそは辛うじていとをほしう覚ゆるも割愛して第二位に下しつるまゝにさてもしのび難きは上の印をつけ置きたりやうく螢雪のまどに光り加はれるはうれしともうれしからずやは点者のはいたくたち後れて恥かぐやかしうなむ

昭和五年九月末つ方

點者

「早秋」では、歌の題が「初秋」ならば「吹き入る風のけさは身にしむ」という表現があうというものである。題詠歌では、題に示された情景を理解し適切な言葉を選ばなければならぬ。「孝」では、親を思うときはいつも幼少の頃の心になっていることを詠んでいる。歌子は「げにぞ



子と云ふもの、真情」と理解するが、「孝の心しらひ深くあらまほし」と述べている。ここでも歌の題の理解を深めて詠むことを求めている。

歌子は、点者の評で優れた歌が多く思い迷ったと述べている。日を得た者は「早秋」で一名、「孝」では二名いる。

5 競点の巻 昭和五年十月(二三二)

題一 紅葉賀

日 一五 ひるかへす舞の袂のか、やきにうら(か、)や

さ(か)しとや紅葉ちるらん

松田扶盈子

めでたうもこは猶四句同じくはかくあらば

や上句はことに華やかなり

や結句も今少しあらまほしきやうなれどい

とさばかりはとてなん

題二 西行法師

星上 二二二 ま(くもりなき)こころの玉(を)もたる身

(なれ)はしろかねの猫のあたひ(削除)も

何にかは(削除)せむ

思ひよられたれどいひのなし今少しとり

直してめでたくなり

扶盈子

たれどすべなし

点者評

こたびの巻は題のたやすからざりしけるや

日頃よりもたち後れたるがすくなからで

口をしうこそは

されどまれにはいとよくよみおほせたまへるも

ありしは少し心ゆきてそ覚えたりし猶

大方よりは、やうく、高峰近くはす、み

たまひついかでたゆみなういそしみ

たまへかし

昭和五年十月半

點者

「紅葉賀」の和歌は、笛子の記憶の中にある情景なのだろうか。点者の評にあるように情景が明るく華やかである。

笛子の和歌は、紅葉を眺める若い女性のあでやかな振袖の袂が秋風に吹かれて、まるで舞を舞っているようである。その姿は秋の日に映えて輝くように美しい。優雅なその姿に、さらに美しさを添えようというのだろうか、紅葉が散っている、という意である。歌子は、「か、やき」「うらか、やかし」と言葉を重ねて強調している。結句の「紅葉ちるらん」は平凡に思うのか、「今少し」と工夫を求めている。「西行法師」の添削は、点者が「今少し直してめでた

なりにたれどすべなし」と述べているように、添削の後をたどって読んでみるが、和歌としては整わない。「しろかねの猫」とは、『吾妻鏡』文治二年閏七月一日に鶴岡社頭で頼朝は西行と出会う。西行は頼朝に歌道や兵法のことについて尋ねられて答えた。翌日退出する西行に頼朝は銀の猫を贈物とした。西行はこれを拝領したが、門外で遊んでいた子どもに与えたという話を和歌に詠みこんだのである。

6 競点の巻 昭和五年十一月(二三三)

題一 火桶

松田扶盈子

月 二〇 世の中のすゝむにつれてとし／＼に火桶にとほくなり増さりつゝ、

げにさぞあらんかしこは殊に若きおもとの  
すさびと覚えてをかし猶いはゞ下句  
もとのまゝにてもよく聞くゆめれど同じ句  
は「古き火桶はすさめられつゝ、」などあ  
らばことにめでたかるべきもかくても

題二 猿

扶盈子

月上 四五 初み雪山にふりけむこの夕ふもとのいほにま

しらなくなり

げにさもやと覚ゆいひのなしもとゞこほ  
る所なしされど猶いはゞ「初み雪山に  
ふりけん里近く今宵ましらの来てそなく  
なる」などあらばことによき歌とも  
た、へつべきをや

点者評

いとさばかりは容易すからぬ題を大方よく  
よみおほせたまへりなされど猿は同じ  
やうなるたけだちの第一位にもほさば  
のほせもしつべきが数首ありしかばあまり  
にさるものゝ多きは天に二日なしとさへいはれ  
たる古言にも背きぬべきが怖ろしさに  
すべてを第二位に下ししつるからに火桶  
のかたも其に准じて大方同じなみにし  
つるをよみ人たちがで／＼ゆるし給へよ  
昭和五年十一月末つきた 点者

卷末の評にむずかしい題をよく詠んでいる。題「猿」では競点を日にすべき和歌は数首あるが、「天に二日なし」というように、第一位の和歌は一首であるべきなので、すべてを第二位にしたとある。「火桶」もそれに準じて競点

を付したと記している。点者としての姿勢の一端を示したものである。

「火桶」は古くから使用されており、平安時代の絵巻に描かれ、『枕草子』の「春はあけぼの」の冬に「火桶の火も白き灰がちになりてわろし」と書かれている。石炭ストーブは安政三（一八五六）年に北海道で作られた。明治から大正にかけては外国製ストーブが多く輸入され、燃料は主に薪か石炭であった。明治三十三年（一九〇〇）年頃にはガスストーブが日本に輸入され、明治末期には電気ストーブが登場し、大正初期には国産品も作られたが、電気料金が高く庶民には手の届かないものであった。

笛子の和歌は、時代が進むにつれて、新しい暖房器具が登場したことを背景にした和歌である。世の中が進歩するにつれて、新しい文明の利器が毎年のように登場してくる。暖をとるために火桶を使っていたのだが、それもだんだん使わなくなってきたという意の和歌である。歌子は、若いあなたならばそうのだろうと頷いている。新しいものと古いものを比べる意味を持たせて、下の句を「古き火桶はすさめられつ」とあれば和歌が格別によくなくなるとした。「猿」の和歌は、情景もよく詠まれていて調べもどこおるところがないとしながら「猶いはゞ」と参考になる和歌を示している。山は初雪が降ったのだろう。餌を求めて

来たのだろうか。夕方に、麓の庵に猿が来て鳴いていると  
笛子は詠んだ。「ふもとのいほ」は猿のいる位置を特定し、  
残光のある夕方に猿の鳴き声が響くとした。歌子は、「この夕ふもとのいほ」を「里近く今宵」に変えた。夜になって  
辺りは暗くなり、どこだかわからないが人里近いところに猿が来て鳴いていると変えたのである。夜の闇の中に、猿のするどい鳴き声が響く。言葉を変えることによって猿の鳴き声が変わったのである。

7 競点の巻 昭和五年十二月（二三四）

題一 惜年

蜂須賀扶盈子

月上 一五 をしみても猶あまりある年の瀬をやまひの

床に越えぬへき哉

いとしようもこそはいひのなしもよくと、  
のほりて申すむねなし

猶いはゞ初二句に少しあらまほしき心地  
はすれどかくながらも

題二 梅もとき

扶盈子

月 五八 その実こそめく、も見ゆれ梅もとき枝はにくけ  
に道をふさげと（たきぬ）

げにもさる事こそあれ猶結句はかくあらん  
方二句に

むかへてつきくしかるべし

点者評

こたびのはよきも悪しきもうちませ

てこそ見えたりしかされどよみ人の

いはんと欲せらるゝところをつゝみなく

いはれたらんと覚えていとうれしう

いひかひありとこそはこの一とせもよく

いそしみたまひき来ん年もなほ

今一きはとこゝろふり起こして神ながら

の道にすゝみたまへや かしこ

昭和五年十二月半

點者

「惜年」の和歌は、年の瀬に病の床にある笛子の心情を詠んだものである。昭和五年十月に、笛子は松田正之と協議離婚をした。離婚に至った経緯は不明であるが、笛子にとっては何かと心労の多い一年ではなかったか。笛子の状況を知る歌子は「いとしようもこそは」と笛子の心中に思いを寄せる。和歌としてはよくととのつているが、初めの二句の「猶あまりある」を平凡と思つたのか「猶いはゞ」と表現の工夫を求めている。

梅もどきは葉や枝ぶりが梅に似ていて、実のつき方も梅ににていることから梅もどきと名づけられている。晩秋から初冬にかけて実は赤くなり、葉は落ちて実が残る。赤い実は木々の間で目立ち愛らしく見えるが、細い枝がからむように繁り、道を塞ぐ様子を詠んだ。歌子はその情景を「げにもさることこそあれ」と評している。

卷末の点者の評に「こたびのはよきも悪しきもうちませてこそ見えたり」とあるが、笛子の競点は月上、月と第二位の点を得ている。

8 競点の巻 昭和六年一月(二二二)

題一 松樹緑久

月上 三五 ふるさとはあれはてたれと軒の松むかしの色

に猶栄えつゝ、

こも一わたりよく聞えて且四五句のあたりもげにと聞ゆかし

猶いはゞこは同じくは古里松などならましかはと口をし

題二 鶏

日 三八 ふりつもる雪をけたて、庭つとり垣のほとりに  
笛子

ゑを（何）あさるらん

をりからの光景さる事と覚えてけ近くをか  
し猶結句はもとの

ま、にてもけしうはあらねど同じくはかく  
あらばや

点者評

大御代のみさかへるたぐへつべき松のみとりの久  
しは新年のほぎことにはふさはしけれど

うたひいでん事はたやすからざるをこの方に  
第一位なるが多かりしはいと心ゆきてこそ覚え

たりしか猶鶏のかたにはさはいへどをかしうも  
珍らかにも聞ゆるが少なからざりしかど少し申

すむねどもありてことにえぬきいで能はずなどして  
ふと見てはたち後れたるやうにありしはいさ、か

口をしくもありきはやとまれやうく進歩のあと  
しるきはうれしとも嬉しくこそは

昭和六年一月半

点者

一月の題として「松樹緑久」を出している。点者の評に

あるように松の緑を題材にした和歌は多い。松は一年中緑  
で散ることがないから、永久、永遠の意味を持ち、特に新  
年の祝にふさわしいとして詠まれる。和歌の題としてはむ

ずかしいものとしている。

笛子は故郷が荒れ果てているが、松は以前と変わらず豊  
かに緑の色で豊かに栄えていると詠んでいる。歌子は、こ  
の歌には「古里松」の題ならば歌の情景に合い、そのこと  
を残念に思うと述べる。

「鶏」では、庭に降り積もる雪を蹴立てて鶏が垣根のと  
ころで餌をついばんでいる様子を歌う。歌子はついばんで  
いるものが「ゑ」（餌）だとせず、虫なのか木の実なのか  
わからないがあさっているとした。競点は第一位の日であ  
るが、「猶」といって結句の工夫を示した。

今様

1 競点の巻 一ノ組 昭和五年六月（二二七）

題一 田植

松田扶盈子

日 一〇 つはめ（は）ひくくも（削除）飛ひかひて わ

か葉のかをり流れきぬ

ことしも田子のさなへとる ころかやひなのな

りところ

ゆきても見まし子らつれて

大方申すむねなくよくと、のひたりこはや  
むごとなき姫たちの

題二 鯉幟

すさびと覚えて何とかやいふらんどちにう  
ければぬべく恐ろし  
けれど歌はすてかたきを如何はせん

扶盈子

月上 二一 やとの若竹すくよかに 生ひたつ見えて鯉の

ほり

高くか、けしやのむねに 五月の朝（ふくや

菖蒲）のかせかをる

短編なればにや申すむねも少なく大かた

なつかしくこそは

点者評

こたびのはをかしきも少なからずはたことに

無下に立ち下れりと覚ゆるもあらざりしは

いとうれしうなむなほいはゞ一句くはいとめで

たしと見ゆるも多かりしかど長篇なるは首

尾相聯續せず又はや、矛盾を覚ゆるが

如きも候ひき故に長きをものせられんには

よくく打ちかへし考えたまへかし且をりく

短篇を試みてならはし給はんぞよき詩にて

も長篇はいと容易からぬものとぞいふめるをや

昭和五年六月半

點者

今様は七五調の歌の形式である。短歌とちがい言葉の数

も多い。点者の評の中で、長編になると内容の続きが悪く

矛盾が起こる。長編の場合によく読み返して考えるように

と注意している。笛子の作は、「田植」「鯉幟」のどちらも

短篇で内容は整っている。「田植」は、燕、若葉。田の早苗、

鳥の雛と六月の風物を取り上げ、「ゆきても見まし子らつ

れて」と結んでいる。この歌を歌子は貴族の姫たちのすさ

びのように思われるとした。

「鯉幟」では、「五月のあさのかせかをる」を月並みのよ

うに思われたのか「ふくや菖蒲のかせかをる」と添削した。

端午の節句では邪気を払うために屋根に菖蒲をふく。「五

月のあさ」を「ふくや菖蒲」とすることで、情景をより明

らかにした。

歌合

1 歌合の巻 昭和五年四月（二二五）

題一 岸山吹

五番

左

五月乙女俊

水底のはなはちらせと筏士も

水棹よくらん岸のやま吹

右 勝 松田笛子

よへの雨にみかきましけむしたりさく

岸のやま吹水にひたれる

判者評

左よみ人のところは水底に移ろふ

花のかけはちらせどもさしの山吹の

まことの花には水棹ふれじと除く

らんの意ならめど少し難悟なり

右何となけれどげにさもやと覚えて

をかしくはた申すむねもあらねば

勝はこたびも右にこそ

題二 開壘

廿二番

左 勝 春子

野もやまもきり開かれて年々に

いやさかへゆく四方の民くさ

右 笛子

あら小田をたがやし(に) 歛入れ(に) そめし賤の男の

顔は(に) のそみのいろに(そ) か、よふ

評 左

一わたりよく聞えたり

右

思いよられたれどいひのなし

少し申すむねありかくてよくなり

にたれどいかゝはせん

こたびも左勝

判者評

この巻きにはめでたしと覚ゆるも

すくなからすはありしかど少し

よみ人の数多からざりしは何と

なうさひしき心地こそすれ春の

わかれも近うなりぬいかで言の葉

の花もしげうつみ出でたまへかし

昭和五年四月半

點者しるす

「五番の「岸山吹」では、左の歌は少し難しく理解しにくいと評した。右の笛子の和歌は素直な歌であるが、情景がそうであるとはわかる歌なので勝とした。「こたびも」とあるのは、前の四番の歌も右を勝にしたという意である。廿二番の「開壘」では、左は題の意をよく理解して詠んでいくとして勝にした。右の笛子の歌には添削をし、言葉の選択、助詞の使い方を注意指導をしている。「たがやし」を「歛入れ」とすることで、情景をより具体的に表現した。

2 歌合の巻 昭和五年八月(二三〇)

題一 花火

四番

左 勝

松田扶盈子

うちあくる花火うつくしこきつれし

ふなはた近く火の粉みたれて

右

林しつ子

星とちるはなひ美し打ちあくる

むかひのきしに火の粉あひつゝ

評 左右ともに花火とありて更に火の

粉といはれたる少しくだゝしき

心地す

右初句つぎくしからずこは何とか

ことざまにあらまほし結句こも「火の

こ乱れて」などあらむ方なるべし

左力をはるかに右に立ちこえたり

三十二番

左

扶盈子

籠の中にかひつるはとのあやしくも

千里の外に使すといふ

右 勝

須磨子

夏深きかこにあうむのこめられて

あつしくと人のまねする

評

巻軸のつがひと心せられたる使用する

鳩人まねびあう武鳥のつかひはた

をかしくもおほゆる上にいづれもよく

と、のほりて申すむねなし

猶いはゞ左の理りよく聞えてものく

しきもさる事ながら右の幼げに

け近きはことに心とまりてなん

左方勝は右方にゆづられよまけ

判者評

たりともなまゝの勝にはまさらんかし

黒金もとけつへき三伏の暑さにもた

ゆまずいそしみたまひし後達が

心しらひも見えてめでたきもすくなから

ざりしはいと心ゆきてこそ覚えた

りしかやうく秋風も音つれそめつ

題二 籠中鳥

點者



今一きぎみの力入り見せたまへや

昭和五年八月半

點者

「花火」を詠んだ四番の歌では、「花火」「火の粉」といい言葉を二つ入れるのはよくない。左の笛子の力は、右よりもはるかにこえていると書いている。

「籠中鳥」では右は、籠御の中の鳩が千里も飛んで使いをする不思議さを詠んでいる。右の歌は幼げに、雄武が暑い、暑いと人まねすることを詠んでいることを「幼げにけ近」く感じ、心にとまると評した。

3 歌合の巻 昭和六年四月（二二六）

題一 故郷花

一番

左

蜂須賀笛子

もとすみし家は人手にわたれても

はなのさかりは見るよしもかな

右勝

服部繁子

なつかしき花の吹雪を浴ひてたつ

われを見しるや里のわらはへ

評 あはれいみじきもめでたき巻頭のつがひにもこそは

左は今様の世態をとらへてかつ花に心の

なほ引かる、よしをいはれたるいと

あはれなりつれど強ひていはゞ下句のいひ

のなしは猶あらまほし

右はこゝろもことばもうるはしくめでたし

年へて訪らはれたる故郷の情況面影に

見ゆる心地して心にくゝそ覚ゆるや

左のためいとほしけれどこの右には負けられよかし

題二 雲影

廿四番

左勝

笛子

桜かりはれきの衣（も）ぬれやせむ

あやしき雲のかけうこきゝぬ

右

美都子

根芹つむ（削除）沢（水）には（うつるをみ）れた

る（削除）は大空を

をりくしるき雲のなかるゝ

評

左も右も力あるどちの口つきと覚

えてをかしからずやは

猶左二句「きぬも」あらまほし

右心しらひは左にたちまさりて覚ゆ

れど少し難渋なりこれは根芹つむ

沢水にうつるを見れば青くはれたる  
大空ををりく白きくもの影流る、

よと迺いはでは聞えず

依而以左為勝

点者評

こたびの巻にはいとめでたきが少なからで点者もいいたう心ゆきてこそ覚えたりしか猶大かたよりいはゞ玉石混合するやうにぞありしざるを歌合せのつねとすよき歌の負方になりたるよからぬ

が勝をえられたるなどもありしは  
少しとほしく覚えたりしかな

昭和六年四月半

点者

「故郷花」の四番の歌は左右ともに優れた歌であるが、左は強いていえば下句の表現に工夫をしてほしい。右は歌の心も言葉も美しく、故郷の情景を見る心地がすると述べ、心にくいばかりであるとし、右の勝とした。

「雲影」廿四番、左の笛子の歌、「衣」を「ころも」と詠み「ころもぬれやせむ」としたが、歌子は「きぬ」と詠ませて「きぬもぬれやせん」とした。右の歌は情景がわかりにくく、根芹をつむ沢水に青く晴れた大空が映り折々に

白い雲が流れるとまで読まないと理解されないとした。

笛子の詠む和歌は素直でわかりやすい歌である。競点は月が最も多く、他に日、月上で星は少ない。全体として、和歌の評価は高いものとなっている。

卷末の歌子の評を見ると、「猶いはゞ」「今少し」など工夫を求める言葉が目立つ。従来和歌の表現ではなく新しい工夫、言葉の選び方を求めている。この言い方は他の和歌にもよく見られる。また、詠出者たちの上達ぶりをほめ、なお一層の研鑽を求めている。

実践女学校の教員であつた坂寄美都子の孫嫁にあたる坂寄衆子氏は、中学生の頃に柳原白蓮の会「ことたま」で和歌を学んでいたという。心に浮かんだことなどを和歌に詠み、添削指導を受けるといふものであつた。白蓮は口数が少なく、一言二言話す方だつたという。白蓮の会では、あまり良くない和歌でも厳しく批判することはなく、「こちらのほうがいいかしらねえ」といったようなおだやかな言い方をしていた。会の雰囲気は雅なもので、集った人たちの知性や教養がうかがわれるものがあつたという。坂寄美都子の晩年衆子氏に「下田先生ははっきりした和歌がお好みだつた」と語つたという。「はっきりした」とは、情景

が明らかに理解されるような表現を良しとしたことだろう。また指導にあたって、下手な歌でも駄目な和歌と決めつけるのではなく、長所を認めて、表現の工夫などを指導したという。

文學部の歌会も白蓮の会と同様に穏やかで雅な雰囲気であったと思われる。歌人であり、女流教育者としての歌子は、和歌の指導を積極的に行っていた。月一回の文學部の歌会とはいえ七十首以上の和歌の添削にはかなりの時間と労力を割いていたはずである。歌子は、文學部の会員に「今少し」「猶いは、」などの言葉に、題の理解、言葉の選択、表現の工夫など研鑽を積むことを求めた。

『各評の巻』の「各評」は今日の合評会にあたる。歌の結社において参加者の数名が批評し、最後に指導者が批評する。詠出者名を伏せておき後で記入するものと、最初から氏名を記入するものと両方ある。笛子の和歌が収載されている資料の内『競点の巻』にも氏名を最初から書いたものと後から書いたものがある。また歌の題の言い方は「御題」「お題」というのが一般的のようである。『詠歌の栞』や「なよ竹」に歌の題を「兼題」と表記しているが、今日ではその言い方はあまりないようである。

蜂須賀正韶と娘笛子、そして下田歌子との関わりを書簡

などの資料をとおして考察してきた。長女年子が離婚後に自活の道を切り開いていったことは(一)で述べたが、その背景にあるのは蜂須賀農場の争議があり、蜂須賀家の内情が厳しいものになっていったという事情があった。年子は自活の手段として手芸の道を選び歩き始めた。年子のそうした状況を考えると、笛子も何らかの自活の手段を必要としていたのではないだろうか。また古い慣習の中にあつた貴族の生活では、結婚によって得ていたはずの生活の安定を失った出戻りの娘は不憫に思うが、家にとつてはいわゆるお荷物で、世間に対してもどこか肩身の狭い思いをしていた時代であつた。岩波文庫の『松浦宮物語』の刊行は、笛子の文学的才能、力量によるものであるが、将来にわたつての自活の手段の入り口であつたかと思われる。

笛子の生活支援を考えたのか、歌子は笛子を習字の教員として採用している。「なよ竹」第二十一号(昭和六年十二月)の「母校職員異動」の「高等女學部」の項に「蜂須賀笛子先生 四月より一二年のお習字お受け持」とあり、巻末の「本校職員(昭和六年十二月現在)」の「高等女學部教員」の項では「習字 蜂須賀笛子 麹町區平川町六ノ六 萬平ホテル内」と記されている。実践女子学園の教職員辞令簿には蜂須賀笛子の名は見られない。また「なよ竹」第二十三號(昭和十年三月)の「本校教職員並學友會

會員名簿」には笛子の名はなく、笛子の在任期間は短いものだったと思われる。病弱だった笛子にとって、定まった仕事を持つことは厳しかったと思われる。

笛子が万平ホテルにいつまで滞在していたか不明である。東京万平ホテルは洋室八二室を設置したホテルで、昭和六年（一九三一）に開業、昭和十四年（一九三九）に閉鎖された。東京万平ホテルの図版は、軽井沢万平ホテルのご好意により当時の絵葉書を掲載したものである。

坂寄衆子氏には柳原白蓮の「ことたま」に参加していた時の話、また祖母である坂寄美都子、下田歌子の和歌の好みなどの話など貴重な話を聞かせていただいた。藤田美智子氏、伊藤理恵子氏には現在の短歌の結社の様子、合評会



万平ホテル  
位 置 東京市  
豊 町 區 平 河 町  
六 丁 目 六 番 地  
距 離 東京驛へ自動車  
五 分  
山 電 平 河 町 下 車 徒  
歩 三 分  
設 備 客 室 數 洋 室 七 十  
大 小 集 會 場 設 備  
食 事 和 洋 兩 式

東京万平ホテル

などについてを御教示いただいた。今回も多くの方々にお力添えをいただき感謝申し上げます。

### 参考文献

- 湯本豪一著 『図説明治事物起源事典』 柏書房 一九九六  
実践女子学園一〇〇年史編纂委員会編 『実践女子学園一〇〇年史』 実践女子学園 平成十三年

（おおい みよこ・実践女子大学非常勤講師）







星三 福田 秋の  
 秋の國の情趣をまことと受けし上句のくちりなりけり可し  
 才落しは然すかたよくありぬ  
 初三句を隔てて山廻りや  
 初三句を隔てて山廻りや  
 カ、中句のくちりなりぬ  
 カ、中句のくちりなりぬ  
 下多一子  
 下多一子

各評七卷  
 文学部  
 昭和五年  
 九月

題一 早秋

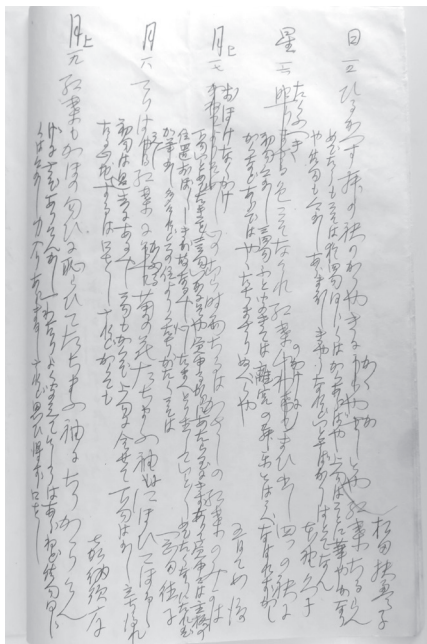
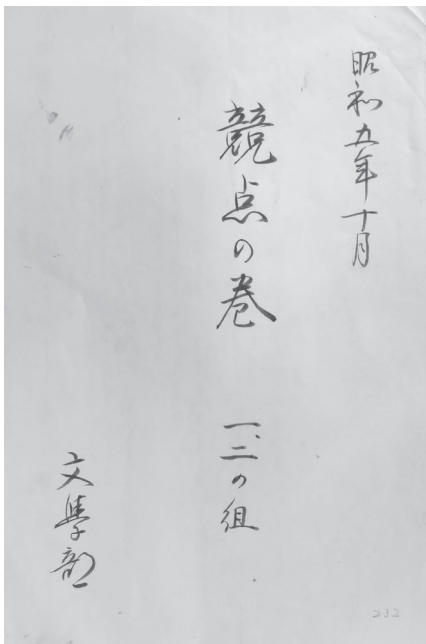
星三 早秋  
 初三句を隔てて山廻りや  
 カ、中句のくちりなりぬ  
 カ、中句のくちりなりぬ  
 下多一子  
 下多一子

点者評

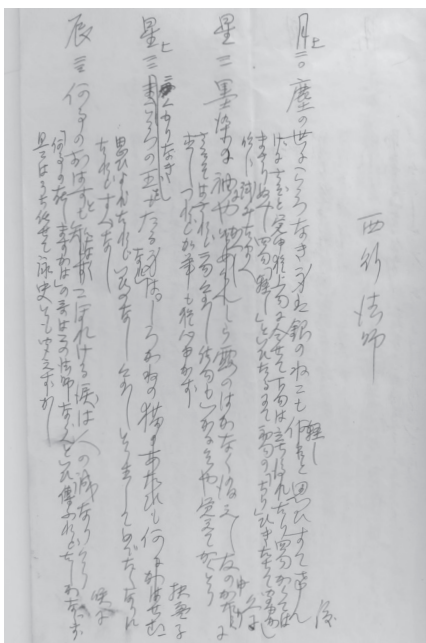
星三 孝  
 父世を事し通をたう(孝)人  
 孝の心は  
 孝の心は  
 孝の心は

題二 孝

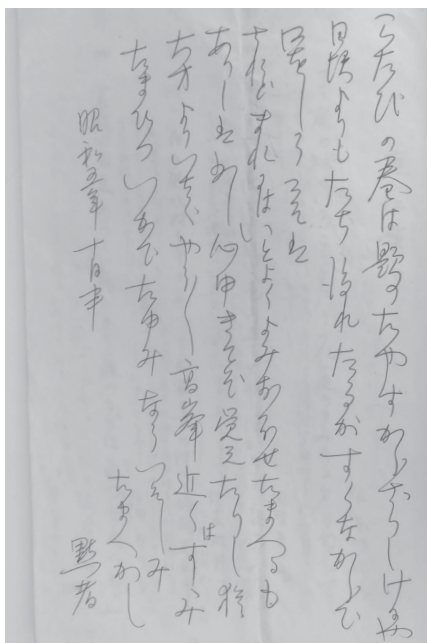




題一 紅葉賀



題二 西行法師



点者評



月五 午 ともも 猶ありある 毎の 櫻を 一 巻 終えぬ 一 巻 終  
 日 三 子 ともも 免か 下 けき を 小 巻 終 一 巻 終 一 巻 終 一 巻 終  
 辰 三 四 ともも 免か 下 けき を 小 巻 終 一 巻 終 一 巻 終 一 巻 終  
 星 六 ともも 免か 下 けき を 小 巻 終 一 巻 終 一 巻 終 一 巻 終  
 星 元 備 ともも 免か 下 けき を 小 巻 終 一 巻 終 一 巻 終 一 巻 終

昭和五年十二月  
 競点の巻  
 文学部

題一 惜年

らたひのよきも 櫻の さいり さいり さいり  
 今一 幸は ともも 免か 下 けき を 小 巻 終 一 巻 終 一 巻 終 一 巻 終  
 昭和五年十二月 終

点者評

月五 花の ともも 免か 下 けき を 小 巻 終 一 巻 終 一 巻 終 一 巻 終  
 日六 ともも 免か 下 けき を 小 巻 終 一 巻 終 一 巻 終 一 巻 終  
 日七 ともも 免か 下 けき を 小 巻 終 一 巻 終 一 巻 終 一 巻 終  
 星六 ともも 免か 下 けき を 小 巻 終 一 巻 終 一 巻 終 一 巻 終  
 月五 花の ともも 免か 下 けき を 小 巻 終 一 巻 終 一 巻 終 一 巻 終

題二 梅もとき





昭和五年四月

歌合の巻

文學部

225

五番  
左  
水底のけきちとせと幾士も  
水榭よくらん 岸のやま吹  
右勝  
よりの雨のみあさみさむしちうさく  
岸のやま吹 水さひたれ  
五月廿二日

題一 岸山吹

五番  
左勝  
御司馬子  
たふし人のこころは水底に移り  
花の軒はちとせしゆきりの山吹の  
まよとの花は水榭のれいと除く  
らうきあふれり 難懐き  
たけとたふれんか子さあやと立てて  
あけらけい申すはひもあや相  
勝 五月廿二日

点者 五番の評

廿二番  
左勝  
神もたまき開あけを年々  
つゆさあえ申す四方の民さ  
右  
あ、少目まはれ 是れ焼の男の  
顔はのきみのいらわく  
五月廿二日

題二 開墾

た  
 一 ちをうよくすえたり  
 大  
 思ひおれち候のしほき  
 あし申すはあうわをよくち  
 ち候のしあはせ  
 ち候もた勝

点者廿二番の評

この巻にはあはれいと定申すも  
 するあはれあはれしあはれ  
 ち候のち候のち候しあはれ  
 ち候のち候のち候しあはれ  
 わあれち候のち候のち候の  
 の花もしあはれしあはれ  
 昭和五年八月廿二日  
 監者 ち候

点者評

昭和五年八月  
 歌合の巻  
 文學部

四番  
 左脇  
 ち候のち候のち候のち候の  
 ち候のち候のち候のち候の  
 右  
 ち候のち候のち候のち候の  
 ち候のち候のち候のち候の

題一 花火

三十二番  
 左  
 籠の中をかひつちほのあやしも  
 千早の外な使すとて  
 右勝  
 長保きかまあるむのこあしむ  
 あつしとくの中ねする

題二 籠中鳥

右初めは花火とていつてあまの  
 粉とてなれたるあまのたつとて  
 必死す  
 右初めつきくしおのこは何と  
 五七のたあまの結句も火の  
 らぬはしなとあまの方なま  
 た力をけうあまのちちえん  
 たり

点者 四番の評

黒金とけりし三伏の暑さをもた  
 申すいそみたるは 後世が  
 心よりいんえそあたまもあま  
 たりはいと心申きてうそ覚え  
 りいあやしむ 枯風もきりれそあ  
 今一きぎみの力いんえそたま  
 昭和五年八月半  
 點者

点者評

巻軸のつねと心せられたる使する  
 旭くまわびあまの感島のつねは  
 ちのつねもあまのちのつねも  
 そのつねで申すは  
 程もたの理りおくせえそあ  
 しきりそあまのちのつねの知  
 け近きはつねの心とつねで  
 左方陽とてあまのちのつね  
 たりともあまのつねはま  
 わ

点者 三十二番の評



一番  
 左 故郷花  
 もとすみ 花はくまわたれとも  
 けさのさあうは又よりセウ節  
 権経 笏子  
 右勝  
 ちかつわき花の吹雪をほひてちう  
 われをえんるわりのわどけん  
 服部 繁子

題一 故郷花

昭和六年四月  
 歌合の巻  
 文学部  
 226

二田香  
 左勝  
 桜かりけりきう衣ぬれやせぬ  
 ちや きき雲のあまうニきくぬ  
 権経 笏子  
 根葉のあはれはつらき  
 ちやう——うき雲のちあう

題二 雲影

あはれつみ、まよむをなまき巻歌のつら  
 るこそは  
 左は台梯の世態をよこし且花の心の  
 ちや引わきやをつけれたるいと  
 阿はれちやうつねのほひこいよ、下向の心  
 のちやうは行ありま  
 右はらうもよほのうさけくあはれ  
 年二訪まはれたる故郷の懐かしの影  
 又争の心、こいにくくを争ちや  
 ちやうちやうの心、ちやうちやうはあけられよ  
 あし

点者 一番の評

くらびや春争むいとあむたまかあな  
 らむと春力いとあむ何ゆきとこえ受え  
 たりしかれちあむいすいすく西石混今  
 せもやうまゑありしさを歌念のつね  
 とりよき歌の原才ありたりよかかぬ  
 か胸をえられたる春よありしと  
 あしむりしと定まらるしと  
 昭和六年四月日申  
 貞吉



点者評

左もたも力あるはその口つきと見  
 えそをわしめり本やは  
 物たさ句 判ねはとあまほ  
 たいしとれたたちまきうてさ申  
 けのめ 新儀たりと根芥つて  
 浪水よりうきををへけくけれたる  
 古空をたりしと白手くあのか流る  
 よと進いそむとすえは  
 依向以左者勝

点者 廿四番の評